

ヴァレリーにおける眠りと目覚め：
『アガート』から『若きパーク』へ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦, 信孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008148

ヴァレリーにおける眠りと目覚め

——『アガート』から『若きパルク』へ——

三 浦 信 孝

緒 言	眠りと目覚めの主題
第1章	『アガート』の諸問題
第2章	「相」理論
第3章	夢と「内的言語」
結 語	夢の詩学のほうへ
付 論	眠りと目覚めにおける「身体」

緒言 眠りと目覚めの主題

「眠りと目覚めの現象は、長いあいだ私の精神の関心を占めてきた。存在するものが存在しないこともできるというこの特性は、何という驚異(1)であろう。」

「眠りのなかに自我を解体し融解させ、しばしの幕合をはきんで、目覚めにふたたび自我を構築する人間というシステムの主要な特性ほど、私の心を打ったものはない。(2)」

日々くり返される意識の誕生と死にほかならぬ眠りと目覚めの経験は、ヴァレリー存在論をデカルト的 cogito から中後期の「時に我思い、時に我在り」(3)へと大きく転回させる契機をなしますが、作品系列の上でも、眠りと目覚めの主題は、眠る女「アンヌ」や眠りの「深い不在から躍り出る」セミラミスなど『旧詩帖』から始まって、テスト氏の入眠で終る『テスト氏との一夜』、テスト氏の夜の内面を描いた「眠りの聖女」アガート、ひとり星の輝やく夜の浜辺に眠り、蛇に噛まれた（夢で？）痛みから目覚める若きパルク、詩篇「あけぼの」で幕をあける詩集 *Charmes*、さらには「初めには眠りがあるだろう」と書き出される *ABC* をはじめ、夜明けや目覚めを歌った数多くの中後期散文詩、そして「孤独者」に谷底へ突き落され妖精たちに囲まれて目覚めるファウストと、最晩年に至るまで一貫する最重要の主題系です。

「寢床を出るが早い、日の出前、夜の引け際、ランプと太陽のあいだで、純粹で深遠な時間に、おのずから産出されることを書きつけた⁽⁴⁾」という *Cahiers* でも、眠りと目覚め、なかんづく「夢」の問題は、意識の機能を探究する上で最大の考察のテーマになっています。

この発表では、このうち、テスト氏の入眠とパルクの目覚めを結ぶアガートの眠りを中心として、この主題の展開を、テキストの書き方そのものの形態的分析から追究していこうと思います。したがって、発表要旨で予定していた中後期散文詩における眠りと目覚めの主題については、時間の制約から、今回は割愛することを初めにお断わりいたします。

第1章 『アガート』の諸問題

1894年に書き始められ、1896年に発表された小説『テスト氏との一夜⁽⁵⁾』は、ヴァレリーの「ペルソナ」とおぼしき若い語り手が、自分の傾倒する人物テスト氏の言動を外から観察し、彼の眼に映じたテスト氏のイメージ⁽⁶⁾を読者に送り返す、いわゆる「ワトソン＝シャーロック方式」を語りの構造としています。

しかし小説の最後では、「自由な精神の恐るべき規律に身を委ね」完全な自己支配のシステムそのものと化したテスト氏が、認識を脅かす身体的苦痛と眠りの到来に挑戦するさまが、主にテスト氏の独白をとおして直接話法で語られます。

しかし、眠りへの下降は、ついに、眠りにおちていくテスト氏自身の独白によっては語りきれず、傍らで観察する *spectateur* である語り手が、テスト氏の入眠を見とどけ、ローソクを手にそっと部屋を出るところで物語は終わります。「私は私を見る、私を見る私を見る、以下同様……」という有名な自己認識の呪文は、無限に以下同様に続くのではなく、意識⁽⁷⁾（見ること）にはどこかで「断絶」が生じ、その先は *personnage* テスト氏にも *spectateur* である語り手にも、語りえぬ闇として残されるのです。

「テスト氏の夜の内面⁽⁸⁾」にさらに下降し、「睡眠下意識」における「注意力⁽⁹⁾」を記述しようとする試みが、1898年初めに書き始められ、1902年には中断され未完に終わった散文詩風テキスト『アガート⁽¹⁰⁾』です。

1903年のカイエに「古い昔のアガート」と題された重要なノートが読ま⁽¹¹⁾れ、そこには、

「ある人間が眠りにおちる——カタレプシー（蠟屈症）的眠り——すなわち一切の感覚的刺戟を断たれた、果てしない眠りとする。で、その

人は夢を見ており、そこに現われる表象は、n番目が1番目というふうに継起するものと想定する。するとその人は、閉ざされた円環nのなかを廻ることになる」

とあり、以下「この循環体の知覚が次第に変質し、遂に目覚めを迎えるまでの過程を描こうとしたことが分ります。

テキストそのものの言葉をモザイク状に繋いで『アガート』の概要を簡単に辿るとすれば、ほぼ次のようになるでしょう。

入眠とともに存在の「底」へと降りていく注意力は、「輝く昼の光の幽かな名残り」をたよりに、闇のなかに転変する「おのずから生まれる形象」を追いますが、視像は遠近の「中心」を「破壊」され「思考は単調に失われて」、互いに相識ることのない幻たちの群のなかに「融けこんでいきます。そしてこのテキストの「淵 abîmes」をなし、眠りの最も深い底をなす第三セカンスにおける圧倒的な水・泳ぎ・航海など流体のメタフォール。眠りの「海」の底で意識はほとんど自己同一性を失いかけて、
「眠る者とは別様に、私は明晰さを保持したまま流れに身を任せる。」「夢とは異なるこの漂流によって、私は眠りの秘密に接近する。」「明日への欲望、明日へと至る私自身の道」を辿りながら、私は「後ろむきに」あの「踏み込むことのできない円環の縁」を経めぐりながら、「真珠」によって形象化される眠りの「法則」を探究する。やがて「闇は優しく精神の誕生に身を譲り」、私の内に「等しく切迫してくる」さまざまな観念は、「神秘的な力に動かされて、私の現前のすばらしい正午 *le midi admirable de ma présence* まで浮上していく。」

以上が「脳漿のなかに見出された手稿」⁽¹²⁾とも題された『アガート』の概要です。では、眠りから目覚めまでの「夜と脳髓」⁽¹²⁾を描いたこのテキストにおいて賭けられた賭金はいったい何だったのでしょうか？

人間はふつう目醒めているか夢みているかのどちらかしかできません。*Je réve ou je veille.* しかしもしも *Je rêve et je veille.* が可能だったら、「もしわれわれが覚醒状態と真の夢とが同時的に可能な状態で見出せるとしたら、すばらしい観察がいろいろと可能になってくるのだが…」⁽¹³⁾条件法でしか書かれ得ない、こうした *dormeur éveillé* の矛盾した状態、それが夢のなかの意識を探究する『アガート』の実験の核心をなしています。

「アガートのためのエチュード」と題された草稿に、「私は *narrateur-théâtre* の状況を設定した」とあるように、『アガート』は「夢という

spectacle théâtral⁽¹⁴⁾」の舞台として自らを明け渡しつつ、しかもその夢を観察し記述する spectateur-scripteur でもあるという矛盾をあえて犯した冒険だった。『テスト氏との一夜』においては、眠りにおちる personnage テスト氏と、それを観察し記述する友人の narrateur が二者に分かれていたため、遂に眠りの向う側は語られずに終わった。『アガート』はこれら二つの機能をひとりの人物のうちに重ね合わせ、眠りの秘密へとまっすぐに参入しようとするのです。

『アガート』の着想や進捗状況を書き送ったジッドやフルマンなど友人宛の手紙(1898年1月から1901年7月にわたる)、また後年『アガート』制作を回顧したカイエの記述をつき合わせてみれば、「文学的意図のまったく外で」「超越的心理学」あるいは「夢の幾何学⁽¹⁵⁾」として試みられたこのテキストは、1901年から翌02年までのいずれかの時期に、暗礁に乗り上げたのか放棄されます。

しかし、死の前年1944年のカイエには、「わずか12枚たらずの手稿〔アガート〕に費やした4年間で、私は失うものよりも獲得したもののほうが多かつた⁽¹⁶⁾」という述懐が読めます。未完に終わった『アガート』の諸問題は、その実験から引出されたあらゆる富をもって、1912年に着手される *La Jeune Parque* へと流れこむのです。

『アガート』が行きづまった要因としては、第一に、眠っている人間が自分の夢を観察できる dormeur éveillé であり、かつ自分の眠りの内部を物語り記述できる dormeur-narrateur でもあるという矛盾。第二には、外界からの力をゼロとおき、一切の感覚への刺戟が断たれた条件下での、身体を捨象した精神の操作という非現実的な状況設定の矛盾があげられます。

しかし、これらの矛盾はいずれも、実験室の中でしか可能でない極限的冒険として、半ば意識的に設定されたものだった。そして『アガート』の実験から引出された富とは、いま整理した二つの矛盾との関連で言うならば、初めの dormeur éveillé あるいは dormeur-narrateur の矛盾を浮彫りにすることになる「相 phase」理論と、「内的言語」「内的対話」の分析、第二の矛盾については、『アガート』から捨象されることによって逆にその重要な機能が明らかになった「身体」に関する考察の深まり、というふうに要約することができます。

発表要旨で指摘しておいたように、「眠りの聖女」アガートが一人称で語るこの独白を、主語と形容詞の一致について10例ほど調べると、形容詞

に “e” féminin がついておらず、語る主体 “je” が非女性化されていることに気づきます。

青春期のヴァレリーに深い感動を与えたモンペリエ美術館のズルバラン作「聖アガート」は、「銀の皿に切り落された双の乳房を捧げもって静かに歩む」聖女の神秘的美しさを描いており、1891年ヴァレリーは、この絵に触発された散文詩風テキストを書いている。そこでは「受肉存在の最も危険な飾りである乳房、母なる大地になぞらえて作られた甘美な乳房の喪失」のうち「純粹性のはじまり」を見ているのが注目されます。⁽¹⁷⁾『アガート』のディスクール上の désexualisation は、伝説上の殉教者聖アガートの désincarnation と無関係とは思われず、アガートの非女性化、脱身体化による純粹性の追究は、ヴァレリーにおける「天使志向 angélisme」と結びつけて考えることができるでしょう。

“e” féminin の脱落と並んで注目されるのは、テスト氏の入眠、パルクの目覚めにあって、あれほど大きな役割を演じていた身体的「苦痛」のテーマが、『アガート』にはまったく登場しないことです。1905-06年のカイエにあるように、「身体は苦痛を通してしか己れを語らない」⁽¹⁸⁾とするならば、アガートにおける「苦痛」のテーマの不在は、アガートにおける「身体性」の不在と深く関わってきます。

しかし、眠りと覚醒時における身体機能の変化を解明するには、1892年の危機に端を発する「身体的なもの ϕ 」と「心的なもの ψ 」の相関関係をめぐる考察から、中後期の「身体・精神・外界 CEM」⁽¹⁹⁾の分析を通して、「精神の端には身体が、しかし身体の端には精神が」⁽²⁰⁾へと大きく転回するヴァレリー身体論を跡づけねばなりません。

したがって、私の発表は、1°「相」理論、2°内的言語、3°身体機能の検討に等しく時間を割くべきところですが、ここでもまた時間の制約から、今回は眠りと目覚めにおける身体の位相については割愛し、「相」理論と「内的言語」に限って見ていくことにします。（割愛した部分は「付論：眠りと目覚めにおける身体」として末尾に収録した。）

第2章 「相」理論

第一の「相 phase」とは、物理や化学で「氷、水、水蒸気は、水という同一の化学組成の三つの異なる相——すなわち固相・液相・気相である」と言うように、物質系のうち他から明確に区別される均質な部分を指している用語です。

1900年ジャン・ペランがソルボンヌで行った熱力学講義を聴講して初めて「相」理論にふれたヴァレリーは、1902年にはアメリカの物理学者ギブスの「不均一系平衡 *équilibre hétérogène*」の理論に強く打たれ、以後カイエには、夢・覚醒・笑い・怒り・注意力・性愛などを、「相」概念を利用して分析する記述が、次第に目立ちはじめます。1902年4月2日付ジッド宛でヴァレリーは、熱力学のエネルギー論が人間精神の分析記述に有効であるとして、この方向での探究に没頭しているむね書き送っており、こうして見ると、相理論に熱中しだした時期と『アガート』放棄の時期（1901—02年）はほぼ重なり合い、両者のあいだには何か論理的な関係があることをうかがわせます。

事実、相理論の眠りや目覚めの分析への最も早い適用は、1902年初めのカイエに見出されます。

「1° 覚醒状態から眠りにおちこむ時の闘い。

2° 眠りから目覚めへ移る時の闘い。

これら二つの闘いは、一方から他方へ揺れ動く性質がある。夢の相と覚醒の相を代る代る通過し、次第に覚醒あるいは眠りのほうへと大きく振れていくのである。」⁽²¹⁾

覚醒時 *veille* と眠り *sommeil* は、それぞれ対立する一つの「相」とされ、入眠 *endormement* と目覚め *éveil* は「相」から「相」への移行として捉えられているわけです。

また、注目すべきことは、1901年、03年のカイエには、「相」というタームこそ使っていませんが、夢と覚醒時を「液相 *phase liquide*」と「固相 *phase solide*」になぞらえる記述が見られ、「夢と覚醒時の違いを、液体と固体のように同じ構成要素の結合関係の違い」として捉える視点が示唆されていることです。⁽²²⁾

「朝が結晶化させたものを夜は溶解する。」⁽²³⁾ ここから、眠りの不在におちこむ人間が、「浸水によって次第に水に吞まれて臨界点に達し、遂には水底にまっすぐ沈み込む船」⁽²⁴⁾に譬えられたり、「私はゆっくり水面に浮上する泳ぎ手のように目覚める」⁽²⁵⁾といった美しい比喩が生まれるのです。

詳しいテキスト分析の余裕はありませんが、「服を脱いで瘦せた体をシーツのなかに泳がせて死んだふり *faire le mort* をし、それから身を反転してベットに潜り込んだ」テスト氏は、「浮身をしているんですよ、水に漂っているんだ、下の方でわずかに横揺れしているのが分かる。ぼくは夜の航海が好きなんです。この睡りの流れ、夜具の流れ、とても好きな

(26)
んです……」と語ります（下線部引用者，以下同様）。

テスト氏の体を包む「夜具 linge」や「シーツ draps」は，パルクがみずから選んだ死の衣裳 “délucieux linceuls” に引きつがれ，「眠り＝水＝死」のテーマ構造は，*La Jeune Parque* の最終セカンズで増幅されて再現されますし，何よりもパルクを死の影の下にすべり込ませた148行目の “barque funèbre” は，翌朝目ざめてみると，342行目で，あけぼのの海に「永遠の釣り人」の小舟 *barque* として奇跡のようにたゆたっている。死の闇をとおしてパルクの生命を閉じ込めたまま，彼女の生を夜明けまで運んだあの481行目の「秘かな方舟 *arche secrète*」は，テスト氏からアガートへと引きつがれた「夜の航海 *navigation de la nuit*」の延長上に生まれた美しいイメージです。

そして，先程もふれた眠りの一番深い淵を描写する『アガート』第三セカンズにおいて，ディスクールを一字一句水中に溶融させるかのように働く圧倒的な流体のメタフォール。こうした水の隠喩は，地中海人ヴァレリーの感性の然らしむるところですが，これが眠りと覚醒時をそれぞれ水の液相と固相になぞらえて分析する「相」理論と見事に通底していることは，興味深いことです。

いささか寄り道をしてしまったかもしれませんが。夢と覚醒時の「相」による分析に戻るとして，ではいったい，これら二つの相を区別する最も重要な特徴は何でしょうか？

1904年頃のカイエには，「覚醒時とは，独立した複数の領域が共存するという感覚が成立することだ」とあり，1905年から6年にかけてカイエでは，「覚醒時には複数の相が存在しうる」という「共存可能性の理論 *Théorie de la compatibilité*」が素描されていきます。

1911年のノートには，「私は存在しかつ思考する，とか，私は本を読みかつ寒さをおぼえる，というように，覚醒時には常に並置され，しかも相互に組合せられない物が共存する。こうしたことは，全てが結合され混同されてしまう夢の中では起り得ない。」なぜなら，「夢とは，間仕切りのない，一つながりの，均一 *homogène* な領域であり，複数の相のあいだの不均等化は生じない」からです。

夢みる人は自分が夢みていることを意識できない。意識という「不均一系」は，夢のなかではただ一相の「均一系」に還元され，自分を見る自分を見るという意識の二重化 *dédoublement* は生じないからです。「夢みる人——夢の「自我」——は自身が夢の登場人物になってしまう。夢みる人

は夢みられているのだ。」⁽³¹⁾こうして、夢とは「完全に閉ざされた系（システム）」⁽³²⁾であり、夢みる人は、夢から醒めない限り、自分が夢みているとは知らずに夢を見つづけることしかできない。夢は他の相とは「両立不可能」なのです。

1940年のカイエでは、ギブスから用語を借りた「相」理論が、「夢は眠りの下にしか現われず、覚醒時からは排除されている、というごく単純な事実の観察に由来するものだった」と述べて、夢と覚醒の両立不能性を強調し、1911年の《Somnia》と表記された53冊目のカイエには逆に、「注意力が覚醒時のものであるということは極めて注目に値する」と言っています。そういえば、問題の1902年のカイエにすでに、「夢において支配的かつ《自由》に振舞っているのは心的現象（cf. *infra*, p. 64上）であり、覚醒時においては注意力である」⁽³³⁾とあったのです。⁽³⁴⁾

以上のことから、「睡眠下意識における注意力」の探究という『アガート』の試みが、その前提からしていかに矛盾にみちた冒険だったか、また夢の舞台でありながら、かつその夢を観察し記述するという意識の複数の「相」がなぜ両立不可能かが、明らかになったと思います。dormeur-éveilléあるいは dormeur-narrateur の可能性は、ここに至ってはっきりと否定されたのです。

「夢は、夢の観察者が夢みる人の内にはいないこと、夢みる人と夢みる人を観察する人が共存できないことによって定義される。」⁽³⁶⁾「夢は、覚醒の相に身をおく観察者によってしか認識され⁽³⁷⁾ない。」夢とは目覚めたあとに辿られる「記憶」にすぎず、「夢みる rêver」という動詞は、ほとんど現在形をもたない。⁽³⁸⁾

ここから、蛇に犯された（？）痛みから目覚めるパルクの問いかけ、

「いったいいかなる苦痛から目覚めたのか、夢の中でいかなる罪が私によって、あるいは私の上に犯されたのか？」⁽³⁹⁾

あるいはまた

「いかなる秘かな連鎖から、夜は、死者たちの間から、おまえを日の光まで再び連れきたったのか？」⁽⁴⁰⁾

というパルクに独特の、記憶に対する問いかけのディスクールが必然的なものとなるのです。眠りの相にあって自分の眠りの内部を観察し記述しようとするアガートとは違って、パルクは、目覚めつつある意識、すなわち眠りの相から覚醒の相へと移行する意識が、自分を舞台にして既に起ったことを果てしなく疑問形で想起するのです。

眠る人と眠る人を観察する人は同一存在のなかには両立しえない以上、テスト氏の場合のように、これを眠りにおちる *personnage* とそれを観察する *narrateur* の二者に分けるか、あるいは、目覚めつつある者がかき消された夢へと遡及するパルクの《*interrogation du s'éveillant sur ce qui a déjà eu lieu dans le sommeil*》の形をとるか、のいずれしかあり得ない。ヴァレリーの認識のリアリズムは、アガートの *dormeur-narrateur* 方式の挫折をはさんで、テスト氏方式からパルク方式へとディスクールの形態を進化させていった、と考えられるのです。

ただし、*La Jeune Parque* でも一箇所だけ、*dormeur-parleur* 形式で書かれたパッセージがあります。第15セカンス、「降りていく甘美さに身をうちまかし」遂に眠りにおちたパルクの口から洩れるエロティックな *balbutiement* ⁽⁴¹⁾ を書きとめた461-4行です。

いまここで一語一語の言葉に則した分析はできませんが、この4行はヴァレリーが「無意識の構築」と呼んだ、詩的言語による夢の言語の驚くべき転位になっていますが、この4行をイタリック体で表記し、さらにカッコで囲んであるのは、アガートの *dormeur-scripteur* の矛盾を明確に意識していたヴァレリーが、*typographie* レヴェルの工夫によって、この4行を語りの他の位相から区別しようとしたためだと推測しても、そう的外れではないでしょう。

第3章 夢と「内的言語」

アガートの *monologue du dormeur éveillé* の矛盾を浮彫りにするのは、単に「相」理論だけではありません。「相」と同じく『アガート』の試みが中断される1902年に初めてカイエ（ただしプレイヤー版アンソロジーの『カイエ』）に登場する「内的言語 *langage intérieur*」の考察は、やがてアガートの *monologue* の根拠そのものを否定することになるのです。

ヴァレリーは1906年発表の散文詩「詩のアマチュア」のなかで、詩人を「人称をもたず起源をもたぬ 内部の言葉 *parole intérieure*」⁽⁴²⁾ の「読み手 *lecteur*」として描いていました。そのコマンテールのように、同じ1905-06年のカイエには、

「私の 内部の言葉 はふいに私を襲い、私はその到来を予見できない。それが語り始めるとき、私は 内部の言葉 の語り手として自分を捉えることができない。私は聴き手 *auditeur* ⁽⁴³⁾ の方にまわってしまう。「自我」とは、内部の言葉 の最初の聴き手なのだ」

という記述が読めます。

そして1902年のカイエに現われる最初の重要なノート——「自我とは、さまざまな内的ヴィジョンの唯一の spectateur として、内部の言葉を聴き理解するものことだ。」したがって、自我の「同一性など問題にならぬ——一なる者は同一性をもたない。」⁽⁴⁴⁾

翌1903年には、「我思うとは、内部の言葉があるということ——したがって「我以外の」誰かが語っていることだ」とあって、後の1921年に与えられることになる定式「我思う、故に何かがある。なぜなら考えるのは「我」ではないのだから」を予告します。⁽⁴⁵⁾⁽⁴⁶⁾

さらに1923—24年には、「考えるとは自らに語ること。」⁽⁴⁷⁾「考えるとは自分という他者とコミュニケーションすること、誰かと話すとは、他者である自分と話すこと。」⁽⁴⁸⁾32—33年になると、「考えるとは自らとコミュニケーションすること。dialogue の可能性。特定の顔立ちをもたず年令も名前ももたぬ Je と、私の名と私の顔をもつもうひとりの Je。個とは対話 dialogue である」とされて、「内的言語」は「内的対話 dialogue intérieur」の概念に引きつがれ、新たな展開を見ることとなります。⁽⁴⁹⁾

43年のカイエは、幼児 (infans 「言葉を話さぬ者」) における思考の誕生が「自分に話す se parler」対話形式の獲得と深く結びついていて、「われわれが自我を受けとるのは他者の口を通してであり、他者こそが自我の源泉であって、思考が必ず内的対話の形をとるのはそのためだ」と言っています。⁽⁵⁰⁾話し—聞く、内部の言葉は自我を parleur と écouteur の二者に分割する。しかし、自我とはまさに話し聞く二者が分かちがたく結ばれた一なる二、二なる一のシステムである。二つの機能の不可分離性が一つの自我を成しているのだ。これを要するに、「一者の二者性、二者の一者性。一者と他者の同一性。同一者のなかの差異。」⁽⁵¹⁾

こうして「内的言語は、同一者の中に他者を設定します。」⁽⁵²⁾しかし、この「内部の分割、内部の差異があってはじめてわれわれは、外部の他者との交渉が可能になる。なぜなら他者との交渉とは、われわれの内なる他者の声を聴く代りに他者の声を聴くことに他ならないのだから。」⁽⁵³⁾すなわち、内的言語とは、内面化された他者の声であり、逆に他者との対話とは、内的言語の外在化なのであって、あらゆるコミュニケーションの基盤には、すでに個が「同一者」と「他者」の内的対話として構造化されているという事情があるのです。

かくて「個とは dialogue」⁽⁵⁴⁾であり、「monologue は存在しない。」⁽⁵⁵⁾あ

らゆる monologue の底には dialogue intérieur があり、これにあえて名前をつけるなら《mono-dialogue⁽⁵⁶⁾》とでも呼ぶ他ありません。

よもや直接的影響関係はないでしょうが、現代の言語学者エミール・バンヴェニストの次の定式が、ヴァレリーの「内的言語」の的確な要約になっていることは、驚くべき coincidence です。

「“monologue” は言表行為に由来する。それは、その外見にもかかわらず、言表行為の基本構造である dialogue の一変種として捉えねばならない。“monologue” とは、内面化された dialogue であり、語り手としての moi と聞き手としての moi の間に交される“langage intérieur⁽⁵⁷⁾”として定式化される。」

ではいったい、「内的言語」「内的対話」の分析は、われわれの眠りと目覚めのテーマとどう関わってくるのか？

ここに、目覚めが内的言語の発生に他ならないことを示す格好のミニ対話があります。『邪念その他』のなかに、「私は、まるで誰かがそこにいるように自分の内部で話す。この虚構の対話は必要だ。それなしには思考というものは成立しない。私はこの〔内部の言葉の〕産出によって目覚めるのだ」と前置きして、「夜の対話」と題する次のような対話が読まれます。⁽⁵⁸⁾

「——そこにいるのは誰だ？

——私だ！

——私って誰だ？

——お前だ。

これが目覚めである。——お前と私。」

このミニ対話は、「目覚めとは、大文字の Moi と小文字の moi の対話である⁽⁵⁹⁾」という定式の最も簡潔な illustration になっています。誰 Qui? という問いによって、一つなかりに閉ざれた眠りの球体に亀裂が生じ、Qui? から Moi と Toi が生まれ、Toi と Moi の再統合として Je が形成されるのです。同じことは、眠りの中の前人称的主体 On から、明確な Je の意識への移行過程としても説明できるでしょう。

「目覚め——

On がふたたび自らを見出す。ふたたび——On が Je になる。On が Je を見出す。ちょうど鏡のなかに誰かの姿を認め、それが自分だと再認して——自らを溶融し、自らを二者から一者にする人のように。⁽⁶⁰⁾

目覚めが内的対話の発生、すなわち内部の言葉の聴取に始まるとするならば、目覚めの Qui? は、「そこにいるのは誰？」よりも「そこで話して

いるのは誰？」の問いとなって発せられるでしょう。若きパルクの目覚めが（そして *La Jeune Parque* の第一行が）、「そこで泣いているのは誰？ Qui pleure là？」の問いで始まる所以です。

ところで、『若きパルク』の幕開きの数行を主語代名詞について見てみると、⁽⁶¹⁾1行目の“Qui pleure là？”の Qui? から、13行目の“Que fais-tu？”の Tu を介して、16行目で初めて“Je scintille...”と Je が登場する。Qui? から Je への移行が Tu による *dédoublement* の再統合として果たされることが、ここでも確認されます。しかしその「私 Je」も「未知らぬ空につながれて」でしかなく、「目覚めつつある者は、自分がどこにいるのか、自分が誰なのか、何が起っているのか分らない。⁽⁶²⁾」「目覚めとは、滝のごとき問いの連続⁽⁶³⁾」なのです。

こうして、「こんなにも私の近くで泣いている」誰かと「そこで泣いているのは誰？」と問う者とのあいだに交されるパルクの「内的対話」は、Qui? Où? Pourquoi? Quel? といった限りない問いの連続として紡ぎだされる。実に、若きパルクのディスクールは、*interrogation* としての *mono-dialogue du s'éveillant* なのです。

内的対話が目覚めの瞬間に始まるとするならば、内部の言葉は、逆に眠りや夢の相ではどういう形をとるのでしょうか？

結論を先取りするならば、ヴァレリーは、*pathologique* なケース、狂人や幻想家、夢みる人にとっては、内的対話は成立しないと言っています。「私の場所を襲って、私の代りに私に語りかけるのは誰？」というデルフォイの巫女ピティアの叫びを思い出して下さい。「(病的なケースにあっては) 内部の言葉はまったく他人の言葉として聴こえる。⁽⁶⁴⁾」内部の言葉を自分のものとして聴取できるには、それを自分が発したのものとして待機する二重化された意識の円環を必要とする。ところが夢のなかでは、「内部の言葉を自分の声として聴くことができない。話している第三者がいると信じてしまう。」⁽⁶⁵⁾ここから、例えばネルヴァルにその典型を見るような、夢と狂気における「分身 *double*」の幻想が生まれるのです。

先にわれわれは、「話し一聞く二者が分かちがたく結ばれて一者になる、二つの機能の不可分離性が一つの自我を形づくる」ことを見ました。しかし「この不可分離性は眠りのなかでは変質し、眠りながら話す人は自分の声を聞くことができない。」⁽⁶⁶⁾したがって眠る人には *parleur* はあっても *écoutateur* は存在しない。「夢のなかでは〔行きだけで〕帰りがない。」⁽⁶⁷⁾「意識とは、聴き手と話し手のあいだの明確な識別度のこと」⁽⁶⁸⁾だとするな

らば、夢ではこの区別が限りなく曖昧となるからです。

こうして、内的対話を分析した1941年のカイエでは、*dialogue intérieur* が「眠りながら語る人 *dormeur parlant* のごとき無意識の行動」においては成立しないことが明言されます。⁽⁷⁰⁾そしてこの内的対話の不成立こそ、ヴァレリーにとっては夢の本質的特徴をなすものなのです。「夢は、眠る人が語りだす言葉と同様、本質的に不分明である。眠る人の耳には聴こえぬ、この奇妙なよく分節されぬディスクールこそ、夢とは何かの観念⁽⁷¹⁾を与えてくれる。」

ところで、ここに言う「眠りながら語る人」とは、他でもないアガートのケースだったのではないのでしょうか？

アガートの眠りの一番深い底 *abîmes* をなす第三セカンスには、「しあわせに、休らぎのなかで身を反転させ浮かび上ってくるのは何？ 習慣もなく、起源もなく、名前ももたず、思いのままに漂い動きまわるのは誰？ 問いかけるのは誰？ 同じ者が答える。同じ者が同じ一行を書いて、消す。それは水の上のエクリチュールにすぎない⁽⁷²⁾」とあります。

この“*Qui interroge? Le même répond.*”は、例えば1920年のカイエの「誰が話し、誰が聞くのか？ それはまったくの同一者ではない。そこには状況と時期の微妙な差異、ズレ *différence* がある⁽⁷²⁾」と較べてみるならば、「自己から自己への言葉の存在が印づける断絶 *coupure*」が、夢みる人のうちには成立しないことを明らかに示すものです。つまり、「透明な同一性」⁽⁷³⁾のなかに漂う「同じ者が書いては消す」夢のテキストは、同一者の中の差異、差延 *différance* をもたぬ故にいかなる「痕跡 *trace*」⁽⁷⁴⁾も残さぬ「水の上のエクリチュールにすぎない」と言われるのです。

結語 夢の詩学のほうへ

以上の分析から、*dormeur éveillé* としてのアガートは、眠りと覚醒時の「相」理論によって否定され、*dormeur-narrateur* としてのアガートは「内的対話」の分析から否定されたこととなります。それとともに、*monologue du dormeur éveillé* としてのアガートの極限的実験が、*mono-dialogue du s'éveillant* たるパルクの構想に、どれほど豊かな富をもたらしたかも、同時に了解可能となってくる。アガートの眠りはパルクの目覚めを準備したと言うのは、まさにその意味です。

“*Qui pleure là?*”の問いによって創始される『若きパルク』のディスクールは、ジャン・ルヴァイアンの言うように、「とらえることのできぬ

他者の痕跡を書くことによって追跡する⁽⁷⁵⁾」試みであり、眠りと目覚めのあわいで、闇と光、欲望と秩序、蛇と太陽のあいだに引き裂かれながら、言語によって、かき消された起源を追い求める、“Qui?”と“Je”の終りなき対話だったので。

ところで、『アガート』が放棄された1902年のカイエには、「無意識の奇怪な諸現象——自動書記⁽⁷⁶⁾など」についての考察が読めます。“l'inconscient”と“écriture automatique”という言葉が、繰り返されますが、ヴァレリーは1902年のカイエに書きつけているのです。

1900年に『夢解釈 Traumdeutung』を公にしたフロイトのごとき夢の意味論とは別様に、夢の形態的記号学を模索したヴァレリーは、他方で夢の言語と詩的言語の深い構造的同質性を見抜いていました。しかし彼は、シュルレアリストたちのような「自動書記」——いわば夢みつつ夢を語ることを理想として、夢を直接文学創造に接続することはしませんでした。

「おのれの夢を書こうと欲する者は限りなく目覚めていなければならない⁽⁷⁷⁾。」ヴァレリーは、あくまで覚醒の相に身をおいて、日常言語による夢の不可記述性の彼方に、詩という「言語の中の一言語」によって夢の言語を意識的に模倣し再構成する「夢の詩学」を追究したので。

フロイト的夢の分析 analyse に対する夢の言語的合成 synthèse ——ヴァレリーの「詩学 Poïétique」の野望は、つまるところそこにあったのではないか？ いま引いた1921年の「アドニス」の一句は、『パルク』の詩法への自註とも考えられますが、同じ21年のカイエには「無意識を構築⁽⁷⁸⁾すること “Construire l'inconscient”」という表現が読まれるのです。

(了)

〔「内的対話」に関する補足〕

「内的言語」の理論展開において、ヴァレリーが自我を *parleur* と *écoutateur* の分割・二重化 *dédoublément* として捉えていたとしても、一方を「非人称的（あるいは純粋）自我」、他方を「個性としての自我」というふうに単純に割りふっていたわけではない。

「何ごとかが〔私の内部で〕おのずから語るなどということがどうして可能なのか？ 話し手と聴き手のどちらが私の「自我」なのか？ 泉の方か、泉から水を飲む人の方か？」といった問いかけがカイエに散見され (cf. M. Lechantre, *op. cit.*, 638, note 27); 内的対話という形をとる内的言語は、ヴァレリーにおいて、*cogito* の同一性を保障するどころか、逆に

その単一性をつき崩し、*cogito* の起源をも同定不能の謎として迷宮に追いこんでしまう類いのものである。

他方、この内的対話を、ヴァレリーが好んで選んだ文学ジャンルとしての「対話」との関連で考えてみるならば、中期の『エウパリノス』『魂と舞踏』『固定観念』、後期の『木についての対話』とつづくプラトンの対話篇が、ヴァレリーの思考にとっていかに必然的形態だったかが理解されるだろうし、初期の『テスト氏との一夜』ですら「二つの声をもったモノローグ」(C. XXII, 125; Lechantre, 638)としての対話構造を孕んでいることが指摘できる。

「1940年のある日、二つの声をもって自分が自分に話しているのに気づいて驚き、おのずからやってくるものを書きつける」ことで『我がファウスト』の制作を開始したヴァレリーは、1941年のカイエにこう書いている。「対話篇をいくつか書いてきた後で、この対話という形式を一切の適用とは独立に感じはじめ、対話の機能を明確に取り出し、これを形態的に考察して、対話の機能的特性を完全に把握する必要を痛感している。」(C. I, 299)

「内的対話」とジャンルとしての「対話」の関係で見落せないのは、散文詩の領域である。1973年ジャン・ルヴァイアンがガリマール〈ポエジー〉叢書の一冊として出した *La Jeune Parque et poèmes en prose*, 1974年ブレイヤード版『カイエ』第2巻に集められ一章を成した《Petits poèmes abstraits》, 1976年に初めて公刊された24篇から成る散文詩集 *Alphabet*, あるいは最近のユルシュラ・フランクリンらの研究によって、ヴァレリー散文詩はようやくその豊かな脈をあらわにしてきたが、その最大の主題の一つが「夜明け」と「目覚め」である。

目覚めを描いたヴァレリーの散文詩は、『続ロンブ』に収められた「未成詩」中の“*Matin*”や『メランジュ』「素材詩」中の“*Méditation avant pensée*”などのように、私が私になる以前、夜明けと絶対的開始の純粹感覚を歌う抒情的オード形式が多い。しかし、例えば *ABC* では、目覚めつつある精神がまだ眠っている肉体に呼びかけ、さながら愛し合う男女の交わすデュオのごとき *mono-dialogue intérieur* になっているものがあり、さらに同じく目覚めを主題とする『メランジュ』中の“*Colloque dans un être*”や「素材詩」“*Chant de l'idée maîtresse*”では、こうした *dialogue intérieur* を外在化させ、人間のうちに緊密に結合されて共存する男性的なものと女性的なものをはっきり二つの存在とし

て形象化し、二つの声から成る dialogue として構成している。内的にせよ、外的にせよ、こうした対話構成をもつ多くの散文詩は、monologue と dialogue をめぐるヴァレリーの思索の展開と切り離しては考えられないだろう。

付論 眠りと目覚めにおける「身体」(覚え書)

「相」「内的言語」につづいて第三に、「身体」の問題に移りましょう。

テストとアガートとパルクにおける眠りの記述に共通するのは、眠りを描く水、海、泳ぎ、舟、航海など、流体のメタフォールの頻出です。ベットにもぐり込んで瘦せた体をシーツに泳がせ、身を反転させながら、テスト氏はこう言います。「浮身をしてるんですよ、水に浮いているんだ、下の方でわずかに横揺れしているのが分かる。……ぼくは夜の航海が好きなんですよ。……この睡りの流れ、夜具の流れ、とっても好きなんです。シーツがピンと張ったり皺のようになると、——ぼくが死んだふりをすると砂のようにそれが落ちかかってくる。」

「船のキャビン」で翌朝までの「夜の航海」にのり出すテスト氏は、「偶然へと向けて精神の蛇を取り」つつ、睡りの「漂流 *dérive*」に意識的に身をまかせるアガートにつながります。彼女は「海の 苦い深みから浮上して、快い木片に乗りこむ。」あるいは、水の中の「ひそやかな自由のゆえに、自分自身のうちに、わずかな意志にも忠実に従う体の敏捷さの泉を解き放つ。満々たる満潮の中に、眼を水に溶かしあわせた遊泳、足を流れにまかせる柔軟な怠惰の豊かさをほどく。海の弾力の中にほとんど立っている人間。冷たい水にシーツのようにゆったりと包まれ、広大な水が体を押しつけてくる。……信じられないような動きの容易さが、私の体の動きをみな吸収してしまう。私の下に隠れている冷たい深さが、私の思いのままに身を譲り、やがて戻ってきて何か夢のなかに私を飲み込むだろう。」
「私は自分を取り巻く水の大いなる静寂に、最ものびのびと伸ばした行為によって答える。しあわせに、休らぎのうちに身を反転するものは何?…」こんな風に、眠りの底にあるアガートは、さながら「水の上のエクリチュール」として浮遊状態にある自分を描きます。

「夜の航海」のイメージはさらに、夜の闇を通してパルクを生夜の夜明けまで運んだあの「秘かな方舟 *arche secrète*」(481行)へとつらなります。一たんはパルクを死の影の中にすべり込ませた *barque funèbre* (148行)は、翌朝目覚めてみると、あけぼのの海にたゆたう釣人の舟として、奇跡

のように再び姿を現わすのです (342行)。

テスト氏がその中にくるまって浮き身をし、死んだふりをする「シーツ draps」、アガートの体を包む冷たい水の「シーツ」は、さらには死の床のパルクを包む「死装束 linceuls」に接続する。《Qui pleure là》, 《Mystérieuse Moi》につづく第三の目覚めを歌う『若きパルク』最終セカンス冒頭の《Délicieux linceuls》に通底すると考えられるのです。そして、ここでも水のメタフォール。パルクが流体として身を拡げる (se répandre) 甘美な屍衣、褥は、彼女が心臓の鼓動をおぼれさせようとした水の墓です。(ここで心臓の鼓動 battements は、同時に、舟のオールをこぐ音 battements de rames を連想させます。) シーツであり水の表面である nappes の中で死んだようになっていたそのシーツの皺、襞 (plis) の中に彼女は今もぐり込み (se plonger), 夢の低みへと身を融かしこむ。

こうして、死の闇にも似た眠りの世界を、水、泳ぎ、航海といった流体のメタフォールで描くヴァレリーの感受性は、眠りと目覚めの分析に適用される相理論にも反映され、覚醒時と眠りの相の違いを、氷と水のごとき「固相」と「液相」の違いとして記述するノートが『カイエ』に頻出するのです。「朝が結晶化させたものを夜は融解する。」(C. II, 52) 夢と覚醒時の違いは、ちょうど固体と液体の違いのように、同じ構成要素間の「結合関係」の違いによるとされる (carnet “Somnia” de 1911)。この発想から次のような美しい一節——「人間はそれと認識できぬまま不在と無力の底に沈んでいく。ちょうど少しずつ水が入りこみ、次第に水に飲まれて臨界点に達した一隻の船が、遂に真直ぐ水底に流れ込むように」(C. II, 184), あるいは、「私は目覚める、ゆっくりと水を浮上する泳ぎ手のように」(C. II, 31) と言われるのです。

水のメタフォールが、眠りを描くテスト、アガート、パルクに共通しているとすれば、テストとパルクにあってアガートには欠落している重要なテーマがあります。「苦痛」のそれです。

『テスト氏との一夜』の終わりでは、睡りの流れに身をまかせていたテスト氏を突然苦痛が襲い、彼の肉体が内側から照らし出され、体の層の奥行が、苦痛のゾーンや極がまざまざと見えてくる。増大する苦痛はテスト氏を強いて自分の身体に注意力を向けさせ、そこに「苦痛の幾何学 géométrie de la souffrance」を追究させるのです。「人間に何ができるか? ぼくはあらゆるものと戦います——自分の体の苦痛を乗り越えても。」

そして、夜の浜辺に目覚めるパルクは、得体の知れぬ痛みを身うちに感

じて我が心に問う、いかなる苦痛が目覚めさせたのか？ J'interroge mon cœur quelle douleur l'éveille?」と。「身に残された苦痛の光に照らされて」(41行)、「注意力」のパルク(49行)は自分の身体の「森深く」(36行)視線を差し向ける。と、その瞳には、「彼女の身を噛んだ一匹の蛇」が「火の燃える戸口の闕に身をうねらせる」(76行)姿が浮びあがりまゝ(実はそれは、蛇に噛まれて彼女自身蛇に変身した「官能」のパルクに他ならないのですが)。やがて完全に夢から醒めたパルクは身うちから蛇を追い払い、精神の支配を取り戻すのですが、奇妙にも、この「神聖な苦痛 douleur divine」が引いていくのを惜しんでうちふるえ、自分の手の細いかみ傷にそっと唇を押しあてます(97-98行)。

こうしてテスト氏とパルクを結ぶラセン状の自己認識「自分を見る自分を見る……」の定式と並んで、テスト氏とパルクを通底させるこの「苦痛」のテーマは、アガートからは完全に欠落しています。1905—06年のカイエにあるように、もしわれわれの「身体は苦痛をとおしてしか己れを語らない」(C.I, 1119)ものとするならば、アガートにおける苦痛の不在は、アガートにおける身体性の不在を物語るものではないでしょうか？

「眼や手など全てが目立たず、話すとき腕を上げたり指を動かしたりすることが決してない」テスト氏も、「しかし軍隊式にがっちりした肩、驚くほど規則的な歩調をもっていた。」オペラ座の熱気の中で火のように燃え立った彼の頬、広い肩、光に金褐色に染められた黒い体、太い円柱に寄りかかった着物を着た塊の全体、円柱の角に押しあてられた彼の頭蓋、金泥に触れて冷やしている右手、紫の影の中の両足などを、語り手は克明に観察し書きとめます。他方『パルク』には、seins, gorge など乳房以下、腕、手、肩、膝、額、髪など、処女の豊かな肉体を暗示する身体イメージが頻出し、うねうねと続くパルクの内的モノローグは、苦痛、涙、受胎、自殺、眠り、目覚めなど「生体の秘密の細部」を「生理学的」に描きだしており、その傍らにアガートを置いてみるならば、アガートにおける身体性の契機がいかに稀薄かは、一目瞭然です。

ここで思い出されるのは、ヴァレリーが青春期を送ったモンペリエの美術館に所蔵される聖アガートの絵です。聖アガートは、ローマ人の拷問を受け殉教をとげた3世紀シチリアの女性ですが、スペインの画家ズルバラン描くところのこの聖アガートの画像を題材に、ヴァレリーは1891年、20才のとき一つの散文詩を書き残しているのです。そこでは、切断された双の乳房を銀の皿にささげて静かに歩む乙女の神秘的な美しさが讃えられ、

特に「受肉存在の最も危険な飾りである乳房，大地の姿になぞらえて作られた甘美な乳房の喪失」のうちに「拷問の悦び」と「純粹性の始まり」を見ていることが注目されます（O. II, 1289）。女性あるいは母性のincarnationである乳房の切断は，女性＝母性の拒否であり，肉の条件の剋克であるがゆえに「純粹性の始まり」だと若いヴァレリーには思えたのです。

ヴァレリーには，1920年カトリーヌ・ポズィとの霊と肉のドラマを生きたあと，21年暮に書き始められ死の直前まで推敲を重ねられた散文詩『天使』を頂点とする，病的なまでのアンジュリスムがありました。特定の名と顔立ち，年齢，習慣，性別といった個別性の中に限定された「みじめな外見」を超越し，「この上なく純粹な精神的実質」という不可能な夢を希求するこの天使志向。「泉に身を写し，そこに人間の姿を認めて涙する」天使とは，ほんらい男でも女でもないアダム以前の存在であり，アガートの脱受肉化による純粹性の希状は，一つにはこのアンジュリスムのオブセッションに結びつけて考えられます。

ところで，アガートの脱受肉化は，女性としての肉の désincarnation であり，したがって désexualisation, すなわち性の刻印の除去を意味するでしょう。発表要旨で指摘しておいたように，「眠りの聖女」アガートが一人称で語るこの独白が，主語と主語の属詞ないし同格の形容詞について10例ほど調べてみると，形容詞末尾に“e” féminin がついておらず，語る主体が実は女性ではないことが分かります。『若きパルク』において“e” féminin が《Harmonieuse Moi》《Mystérieuse Moi》をはじめはっきりと刻印され詩的效果をあげていることを思い合わせるならば，これまであまり注意されてこなかったこの意外な事実は，解明されて然るべき重要な謎です。

私は，このディスクールの désexualisation を，『アガート』における「苦痛」のテーマの不在，身体イメージの稀薄さ，伝説上の聖アガートの乳房切断という三つの現象的要因から考えてきたわけですが，最後に，眠りと目覚めを理論的に分析する上で最も重要な視点との関連で照射をあててみたいと思います。それは，認識の参照基軸としての「身体」という視点です。

第2章の「相」理論で触れたギブスの「不均一系平衡」の理論が，1901—02年頃ヴァレリーに大きな啓示を与えたのは，「1891—2年のあの耐えがたい感受性の暴力と戦う努力」というコンテクストの中ででした。1891—

2年の感受性の危機が、その名もよく知らぬカタロニア系の一婦人に対する常軌を逸した恋情に端を発する、若きヴァレリーにおける自己同一性の危機を指すことは言うまでもありません。この感受性の暴力を悪魔祓いするためには、一切を「心的現象 *phénomènes mentaux*」にすぎぬと見なす必要があった(C. I, 849, 859, 1033, etc.)。心的現象は非現実的な産物である以上、知的認識によって必ずその偶像としての正体を暴くことができる、とヴァレリーは考えたのです。

人間の認識は、不安定な想像力と安定した現実感覚から成るわけで、認識は、想像的・心理的要因 ψ (プサイ) と現実的・身体=物理的要因 φ (ファイ) の複合物として考えてみることもできる。この視点は1892年の危機を脱出する過程で最初に獲得された基本認識であり、 φ と ψ の相関関係を追究するなかでヴァレリーは、1898年には $\varphi + \psi =$ 一定の定式に到達します。そこへ1901—2年の段階でギブスの「不均一系平衡」理論の発見があって、 φ と ψ の二つの相からなる「不均一系 *système hétérogène*」に他ならぬ人間の意識を、「平衡」からの「逸脱」と「回帰」の循環として、すなわち熱力学的エネルギーの「循環」として捉える展望が拓けるわけです。

ところで $\varphi + \psi =$ 一定とは、意識における心理的・想像的な側面 ψ と身体的・現実的な側面 φ が相互に依存し拘束しあっていて、一方が増大すれば他方は減少する、言いかえれば一方の増減と他方の増減を足せば相殺されることを意味しており、したがって $\varphi + \psi = K$ は $\Delta\varphi + \Delta\psi = 0$ とも書かれるわけです。これが、われわれの主題である眠りと目覚めの分析に大きな意味をもってくる。なぜなら、眠りや目覚めは「精神的なもの [ψ] と身体的なもの [φ] の微妙な変換あるいは交換」(C. I, 54) だからです。

目覚めとは、意識の不分明な混沌状態から *Moi* と *Non-Moi* が分かれ (C. II, 160)、心的なもの ψ と身体的なもの φ が分割されて、身体・精神・外界 *Corps*・*Esprit*・*Monde* の明確な識別が成立する過程です。『若きパルク』を制作中の1914年のカイエに、「目覚めどき、人は自分に一つの身体を見出す———というかむしろ身体の一部、手足の一つを見出す…」(C. II, 80) とあるように、誰かが泣いている声に目覚めたパルクが最初に見出すのは、彼女の顔に軽く触れる「手」 *cette main* であり、この *ma main* ならざる *un corps étranger* としての「分断された身体」(ラカン) を他ならぬ自分のものと知覚するとき、目覚めは完成するのです (cf. C. II, 126)。

死の闇から奇跡のようによみがえった「神秘的な私」の第二の目覚め

(第11セカンス)では、まず美しい腕が一個の物体として目に映り、それが「私の腕」として知覚されて二人称 Tu で呼ばれ、さらに私の腕に支えられるようにして拡がる「あけぼの」が知覚される。目覚めとは Corps・Esprit・Monde の弁別化であることの、これは詩的な表現です。

覚醒時とは、ヴァレリーによれば、ある特別な物体である「私の身体 mon corps」の存在によって特徴づけられる相です (C. II, 26, 30)。覚醒時の意識は、自らの身体を基軸にして外界の諸々の事物を分類し距離を計って、自らを空間のパースペクティブの中に位置づける。

《Mystérieuse Moi》の目覚めのパッセージでは、きらめく「海」がパルクの自己認識のための「鏡」の役割を果たし、パルクの「唇」に浮かぶ「微笑」が消えゆく最後の「星々」を、「腕」が「あけぼの」を、「肩」が「波頭」を、パルクの肉体の隠喩だった「小舟」が、海に浮かぶ釣人の「舟」を、という風に、パルクの身体の部分部分が、外界を一つのパースペクティブのもとに統覚する参照軸になっていることが分かります。

だから、「私の身体」こそ「事物の尺度」(C. I, 1317)であり、覚醒時における「コンスタントな参照軸」(C. II, 37)、「参照の道具であり、調節器、覚醒時のランプ——確実な認識のための比較原基」(C. I, 1120)であると言われるのです。

そしてこの身体が、覚醒時にあっては、意識内部でたえず変動する観念の自由な組合せに枠をはめ、過度の逸脱を制限するレギュレーターとして働くため (C. II, 47)、「家並の上を船団が航行する」(C. II, 34)といった認識の錯誤はあらかじめ排除され、あるいは直ちに修正される。したがって「覚醒時とは、ある種の組合せの不条理が予感できる状態として定義される」(C. II, 170) こととなります。現実感覚の支えたる身体的なもの φ の増大が心的なもの ψ の気まぐれを拘束し制限して、 $\varphi + \psi = K$ の ψ は限りなく 0 に近づくのです。

これを裏返せば、「夢は、われわれが《不条理な》組合せが形成されるのを予防するため十分早く介入できなかった結果おこる」と考えられます。覚醒時にあっては、認識の参照軸の役割を果たしていた「私の身体」が、眠りの相ではいわば液化され、固体としての結晶が融解してしまうからです (C. II, 52)。

アガートの眠りの一番深い底をなす第三セカンスに描かれる身体部分に着目するならば、眼は水に溶け、足は流れにながされ、肩も耳も体のすみずみまで水に包まれて、「信じられないような容易さが体のはたらきを全

部吸い込み」「冷たい水の深さが夢の中で私を飲み込んでしまう。」「奇妙な土の不在 l'absence étrange de sol」という『アガート』中の表現も、「夢、土と抵抗感の不在」(C. II, 155)、「目覚めるということは、泳いでいる人がだんだん浅くなっていく海底の地面に足をつけること」(C. II, 79)、「私は足で地面を打ち、この現実の中に自分を確かめる」(C. II, 42)といったカイエに散見される表現に照らしてみるならば、夢の中では“références solides”(C. II, 196)が失われてしまうという意味に読めるでしょう。「苦き海の深みから戻って舟にのりこんだ」アガートの夜の航海は、「六分儀も航海時間も表も」(C. II, 36)奪われて、“points de repère”(C. II, 18)のない闇をただよう「漂流 *dérive*」の様相を呈してきます。

認識の方程式 $\varphi + \psi = K$ において、現実認識の参照軸たる身体 φ が融解して0に近づくと、心的なもの ψ は φ の拘束を解かれて自由に跳梁し、意識に現われる産物はすべて純粋に心的なもの ψ になってしまう (C. II, 196)。こうして、夢は「日中の服従の報酬、狂人と奴隷のお祭さわぎ」(carnet “Somnia” de 1911) になるのです。心的なもの ψ がどんなに自由な組合せを産み出しても、それを不条理として斥ける現実の参照軸は失われている。だから『アガート』の一節にあるように、「最もかけ離れた存在が互いに結びつき、しかもその対照が私に格別の驚きを引き起すわけではない。」あるいは「扉は壁でふさがれ、壁は薄布でできている」といった奇妙な光景がやすやすと受入れられる。「本来ならこうした事態を不条理だと判断するものが眠っている」からです (O. I, 931)。

「《純粋に心的な産物》は、覚醒時にあっては、《外部》の知覚や身体的感覚の圧力に押されて、頭の中にきちんと localisé される」(C. II, 196) ですが、夢の中では「外部の力 forces extérieures」(C. II, 93, 194, etc.) が働かず、夢の自動的展開にはいかなる抵抗も制限もなくなるのです。「外部の力の不在ということが、夢の中で最も注目すべきことだ。」(carnet “Somnia” de 1911)「夢みる人の精神は、外部の力がそこでは廃棄されるか、あるいは全然はたらかないような物質系に似ている。」(O. I, 934)

こうしてわれわれは、『アガート』の実験が、 $\varphi + \psi = K$ において「身体的なもの φ 」を0に近づけたときの「心的・想像的なもの ψ 」の変幻を追跡することになった、という了解に導かれます。1903年の《L'Ancienne Agathe》と題するカイエのノートには、「ある人が眠りにおちる。カタレプシー的眠りとする」(C. II, 237)とありました。これは、「外部の力」を

遮断した実験装置の中で、感覚への刺戟を一切断たれて眠る人間が見る夢の世界の探究を意図したものです。

そして1940年のカイエには、おそらくアガートの実験を念頭において、こう書かれています。「夢についての考察が私の情熱をかきたてたのは——（あたかも摩擦を捨象した天体力学のように）意識やさまざまな心的産物が、外部の力の作用から最も遠く離れたところで、孤立した一つの閉鎖系を形づくるような、特に単純化されたケースをそこに垣間みれるという興味からだった。」（C. II, 186）

以上のことから、『アガート』における身体性の契機の不在はなかば実験的な意図の結果であると結論づけられますし、「眠りの聖女」アガートの *désincarnation* とディスクールのレベルでの *désexualisation* (“e” *féminin* の脱落) の関係も、ほぼ全面的に了解可能になると思います。

こうして、身体性の契機を奪われた *dormeur-narrateur* によるモノローグという『アガート』の極限的な実験は、第一に、睡眠時と覚醒時の「相」の違い、第二に夢みる者における「内的対話」の不成立、第三に、認識の参照軸たる「身体」という三つの問題の探究をとおして、1912年から始まる『若きパルク』の制作に測りしれない富を蓄積していた、と言えるのです。

Citations et notes :

- (1) “Le phénomène de *l'endormissement* et celui du *réveil* m'ont longtemps occupé l'esprit. [...] Quelle merveille que le pouvoir de n'être pas, propriété de ce qui est!” (1939, *Cahiers*, Pléiade, II, 183)
- (2) “Rien ne m'a plus frappé—que cette propriété essentielle du système de l'homme, de se défaire et dissoudre dans le *sommeil*, de se reconstituer au *réveil*—après l'entreacte.” (1941, C. II, 187)
- (3) “Variation sur Descartes: Parfois je pense; et parfois, je suis.” (1920-21, C. II, 1388; 1930, *Choses tues*, *Œuvres*, Pléiade, II, 500; Cf. “Tantôt je pense et tantôt je suis.” 1938, *Discours aux chirurgiens*, O. I, 916)
- (4) “A peine je sors de mon lit, avant le jour, au petit jour, entre la lampe et le soleil, heure pure et profonde, j'ai coutume d'écrire ce qui s'invente de soi-même.” (1926, *Analecta*, O. II, 700)
- (5) *La soirée avec Monsieur Teste*, 1894-96, O. II, 15-25.
- (6) Claude-Edmonde Magny, *Histoire du roman français depuis 1918*, coll. “Point”, Seuil, 266.
- (7) “On peut être sans voir, ce qui signifie que le voir a des *coupures*.”

- (postérieur à 1936 ? *Fin de Monsieur Teste*, O. II, 74)
- (8) “l'ex-commencement d'*Agathe* qui ferait l'intérieur de la nuit de M. Teste.” (Lettre à Gide, juillet 1912, *Correspondance Gide-Valéry*, Gallimard, 427)
- (9) “Méthodes
1892 [...]
1902 “Attention” [...] La conscience sous le sommeil.” (1934, C. I, 839)
- (10) *Agathe*, 1898-1902, in *La Jeune Parque et poèmes en prose*, éd. Jean Levaillant, coll. “Poésie”, Gallimard, 1974; O. II, 1386-93; voir l'étude importante sur *Agathe* de Hiroshi Kumé: “La recherche de la conscience sous le sommeil chez Valéry”, *Cahiers des études françaises*, n° 5, 1976.
- (11) “L'ancienne *Agathe* tel que je l'avais fixé en 98—je crois—ou 97./ Une personne qui s'endort—je suppose un sommeil cataleptique—je veux dire indéfiniment long—je suppose (non sans péril) que toutes les excitations des sens soient abolies. Je suppose enfin qu'elle rêve et que la succession de ses représentations soit telle que la Nme=la lère./Alors elle tourne dans ce cercle *n*,—qui est fermé.” (1903, C. I, 237)
- (12) “Manuscrit trouvé dans une cervelle”, “La nuit et le cerveau”, deux variations parmi d'autres du titre d'*Agathe*.
- (13) “Si nous pouvions trouver un état capable de la veille et du véritable rêve, de belles observations deviendraient possibles...” (1927, “Rêves”, *Autres Rhumbs*, O. II, 651)
- (14) “j'ai posé une situation de *narrateur-théâtre*” (expression dans une note des brouillons d'*Agathe*, citée par Levaillant, *op. cit.*, 170) Cf. “Le rêve—*spectacle théâtral*—représentation de chaque nuit donnée par Messieurs les Réflexes.” (1902, C. II, 13)
- (15) “[...] Or, depuis deux, trois..., dix ans, il n'y a pas eu de sensations pour elle (=une femme qui dort): donc étudier l'appauvrissement du donné avec lequel elle s'est endormie. C'est un problème de *psychologie transcendante, imaginaire* qui est fort dur à même envisager. Les zones successives d'altération des images, la variation de la pensée devenue peu à peu vide seraient curieuse à faire. [...] j'ai classé cet énoncé pour l'étudier à loisir, *géométriquement*, et en dehors de toute littérature.” (Lettre à Gide, le 15 janvier 1898, *op. cit.*, 309-10) Cf. “géométrie du rêve” (1900-01, C. II, 9) à rapprocher de “géométrie de la souffrance” de M. Teste (*La soirée*, O. II, 24)
- (16) “Les 4 ans que j'ai gagnés plus que perdus à travailler les quelque 12 pages du *Mnss* (=Manuscrit trouvé dans une cervelle)” (1944, C. I, 313)

- (17) “[...] les mains pieuses conservent le plat d’argent où palissent les *seins coupés* par le bourreau—les seins inutiles qui se fanent. [...] l’absence de tous fruits à la poitrine./Mais la joie du supplice est dans ce commencement de la pureté: perdre les plus dangereux ornements de l’incarnation,—les seins, les doux seins, faits à l’image de la terre.” (1891, “Glose sur quelques peintures: Musée de Montpellier”, O. II, 1289)
- (18) “Le corps ne parle que par la doubeur.” (1905-06, C. I, 1119.)
- (19) “Au bout de l’esprit, le corps. Mais au bout du corps, l’esprit.” (*Pour un portrait de Monsieur Teste*, 1934, O. I, 65)
- (20) Voir à cet égard l’excellente “Introduction au thème du corps chez P. Valéry” par Kunio Tsunékawa, in *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, n° 30, 1977.
- (21) “Lutte 1° entre la veille et l’endormement/2° entre le sommeil et l’éveillement./Ces 2 luttes ont un caractère oscillatoire. On passe par des *phases* tour à tour de rêve et de veille et de plus en plus longues dans le sens de la veille ou du sommeil.” (1901, C. II, 11) Cf. “S’endormir/dormir/rêver/s’éveiller/veiller” (1905, C. II, 15)
- (22) “le rêve et la veille diffèrent par les “liaisons” comme le *solide* du *liquide*.” (1911, carnet “Somnia”, *Cahier de la Pléiade*, printemps 1949, 11)
- (23) “Comme si le soir *dissolvait* ce que le matin *cristalise*.” (1911, C. II, 52)
- (24) “l’homme sombre dans une absence et une impuissance qui s’ignorent elle-mêmes, comme un *navire* peu à peu que *l’eau* pénètre et qu’elle *boit* en quelque sorte—par degrés jusqu’à ce point critique, qu’il *coule* enfin droit au fond.” (1939, C. II, 184)
- (25) “Je m’éveille comme un *nageur* remonte.” (1907-08, C. II, 31)
- (26) “Il [=M. Teste] se dévêtit tranquillement. Son corps sec *se baigna* dans les draps et fit le mort. Ensuite il *se tourna*, et *s’enfonça* davantage dans le lit trop court./Il me dit en souriant: “Je *fais la planche*. Je *flotte*!...Je sens un *roulis* imperceptible dessous.[...] moi qui adore la *navigation de la nuit*.[...]J’aime ce *courant* de sommeil et de linge: ce linge qui se tend et se plisse, ou se froisse, —qui descend sur moi comme du *sable*, quand je fais le mort.” (*La soirée*, O. II, 24) A propos du métaphore de “liquide”, à rapprocher de la 3ème séquence d’*Agathe* et des vers 465-484 de *La Jeune Parque*.
- (27) “La veille est la possibilité du sentiment de coexistence de plusieurs domaines indépendantes.” (1903-05, C. II, 18)
- (28) “Dans la veille on a plusieurs *phases* en présence.”—“Théorie de la *compatibilité*.” (1905-06, C. II, 23)

- (29) "Il y a toujours en veille des choses juxtaposées et non combinées entre elles—Des variables indépendantes et leurs fonctions, concomitantes; je suis *et* je pense—je lis *et* j'ai froid, etc., ce qui est impossible au rêve où tout se compose." (1911, C. II, 52-53)
- (30) "Rêve=domaine sans cloisons, d'un seul tenant, *homogène*, purement combinatoire, sans inégalité de *phases*." (1905-06, C. II, 23)
- (31) "Dans le rêve tout est rêvé [...] le rêveur—le Moi du rêve—est lui-même un personnage de rêve. [...] Le rêveur est rêvé." (1940, C. II, 185)
- (32) le rêve="un système complet et fermé." (1908, "Etudes et fragments sur le rêve", O. I, 932)
- (33) "Ma meilleure idée des *phases* résulte de l'observation toute simple suivante—*Le rêve n'est que sous le Sommeil*. Il est exclu pendant la veille. Il y a *incompatibilité*." (1940, C. I, 1083)
- (34) "il est très remarquable que *l'attention soit de la veille*." (1911, C. II, 43)
- (35) "Dans le rêve ce sont les *phénomènes* qui paraissent dominateurs et «libres»—et dans la veille c'est l'attention," (1902, C. II, 14)
- (36) "Le rêve se définit par cette absence, cette non-coexistence avec l'observateur." (1929, C. II, 142)
- (37) "nous ne connaissons le rêve que par un observateur placé dans la veille." (1921-22, C. II, 105)
- (38) "Le verbe rêver n'a presque pas de «présent»." (1914, C. II, 75; O. II, 738)
- (39) "J'interroge mon coeur *quelle* douleur l'éveille,
Quel crime par moi-même ou sur moi consommé?..." (vers 26-27)
- (40) "Cherche, du moins, dis-toi, par *quelle* sourde suite
La nuit, d'entre les morts, au jour t'a reconduite?" (vers 413-5)
- (41) "(*La porte basse c'est un bague... où la gaze*
Passe... Tout meurt, tout rit dans la gorge qui jase...
L'oiseau boit sur ta bouche et tu ne peux le voir...
Viens plus bas, parle bas... Le noir n'est pas si noir...)"
- (42) "Si je regarde tout à coup ma véritable pensée, je ne me console pas de devoir subir cette *parole intérieure* sans personne et sans origine. [...] Un poème est une durée pendant laquelle, *lecteur*, je respire une loi qui fut préparée. [...] Je m'abandonne à l'adorable allure: lire, vivre où mènent les mots." (1906, "L'amateur de poèmes", *Album des vers anciens*, O. I, 94-95)
- (43) "Ma *parole intérieure* peut me surprendre et je ne puis la prévoir. Quand elle parle, j'appelle moi non *ce qui parle* (le tiers inconnu) mais l'*auditeur*. Le Moi est le premier auditeur de la *parole in-*

- térieure.*" (1905-06, C. II, 282)
- (44) "Le moi est ce qui entend et comprend la *parole intérieure*, le seul spectateur des visions.[...] Il n'est pas question d'identité—L'unique n'a pas d'identique—la pluralité n'en est pas concevable." (1902, C. II, 278) Cf. "Le moi n'est pas un." (1903, C. II, 279)
- (45) "Je pense=il y a une *parole intérieure*,—donc il y a quelqu'un qui parle." (1903, *Cahiers*, fac-similé du C.N.R.S., III.50; cité par Nicole Celeyrette, in "Les avatars du cogito", *Revue des sciences humaines*, n° 160, 1975, 628)
- (46) "Je pense, donc il y a quelque chose.[...] car ce n'est pas moi qui pense." (1921, C, VIII. 484; Celeyrette, *ibid.*)
- (47) "Penser, c'est se parler," (1924, C. I, 979)
- (48) "Penser, c'est communiquer à un autre qui est soi. Parler à quelqu'un, c'est parler à soi en tant qu'autre." (1923, C. I, 978)
- (49) "Penser c'est communiquer avec soi-même. Possibilité d'un *dialogue*. Le Je est le sans visage, sans âge, sans nom, et un autre Je a mon nom, mon visage./L'individu est un *dialogue*." (1932, C. I, 440)
- (50) "L'enfant joue avec son langage comme avec ses membres, et *se parle*,—et c'est le commencement de la "pensée"—de ce monologue et aparté qui va durer toute sa vie et lui faire croire qu'il est Quelqu'un.[...] Nous recevons notre Moi connaissable et reconnaissable de la bouche d'autrui. *Autrui est source* et demeure si substantiel dans une vie psychique qu'il exige dans toute pensée la *forme dialoguée*. On parle, on entend,—et le *système indivisible Parler-entendre* produit une Dualité—Une [...] Il y a deux personnes en Moi—en un Moi—; un Moi est ce qui est en deux Personnes—mais ce sont deux Personnes—mais ce sont deux fonctions dont l'indivisibilisé fait un Moi." (1943, C. I, 467)
- (51) "Dualité de l'Un; Unité du Deux; identité de l'Un et de l'Autre; différence du Même." (1940, C. II, 327)
- (52) "Le *langage intérieur* crée un *Autre dans le Même*." (1941, C. I, 461)
- (53) "[...] sans cette *division ou différence "interne"*, jamais nous n'aurions commerce avec autrui; car ce commerce consiste dans la substitution d'une voix ou d'une audience (audition) étrangère à la voix ou à l'audience de l'*Autre qui est en nous*." (1931, C. II, 240-41)
- (54) "L'individu est un *dialogue*." (1932, C. I, 440)
- (55) "A la base, le *dialogue intérieur*.—Monologue n'existe pas." (1941, C. I, 300)
- (56) "mono-dialogue" (1928, C, XIII.147; cité par Michel Lechantre, in "L'hiéroglyphe intérieur", *Modern Langage Notes*, mai 1972, 658; la première étude complète du "dialogue intérieur")

- (57) “le “monologue” procède bien de l'énonciation. Il doit être posé, malgré l'apparence, comme une variété du dialogue, structure fondamentale. Le “monologue” est un dialogue intériorisé, formulé en “langage intérieur”, entre un moi locuteur et un moi écouteur.” (Emile Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, II, Gallimard, 85; cité par Ursula Franklin, in *The Rhetoric of Valéry's prose “Aubades”*, Toronto, 1979, 123-4)
- (58) “je parle en moi comme si quelqu'un était là./Il faut qu'il y ait ce *fictif dialogue*./Sans lui, pas de pensée./Et enfin, cette parole, sa signification ne vaut/Qu'après.[...] Je *m'éveille* de cette production.
Dialogue de nuit
—Qui est là ?/—Moi !/—Qui, Moi ?/—Toi./Et c'est le *réveil*.—Le Toi et le Moi,” (1941, *Mauvaises pensées et autres*, O. II, 880)
- (59) “Réveil—Dialogue du Moi et du moi.” (1931, C. II, 315)
- (60) “Réveil—
On se retrouve. RE—*On* se fait *Je*. Comme celui qui voit quelqu'un dans un miroir et s'y re-connait — puis se fond, et de 2 se fait 1.” (1931, C. II, 147)
- (61) “*Qui* pleure là, sinon le vent simple, à cette heure
Seule, avec diamants extrêmes?... Mais *qui* pleure,
Si proche de moi-même au moment de pleurer ?”
“*Que fais-tu*, hérissée, et cette main glacée,
Et *quel* frémissement d'une feuille effacée
Persiste parmi *vous*, îles de mon sein nu?...
Je scintille, liée à ce ciel inconnu...” (vers 1-3 et 13-16)
- (62) “Le s'éveillant ne sait *où* il est, *qui* il est, *ce* qu'il y a—; il est une pluralité de *questions*—à tâtons dans ce qu'il a de plus familier qu'il ne *reconnait* pas encore.” (1926, C. II, 126)
- (63) “l'éveil est une cascade de *questions*.” (1921, C. II, 103)
- (64) “Qui me parle, à ma place ?
Quel écho me répond: Tu mens!
Qui m'illumine?... Qui blasphème ?
(1919, “La Pythie”, *Charmes*, vers 41-43)
- (65) “Cette voix [=voix intérieure] (morbidement) peut devenir tout étrangère” (1920, C. I, 407)
- (66) “Je vois ce que je fais et que j'ignore faire, en tant qu'actes d'autrui. *On* me regarde—*on* me parle de même. Je ne m'attribue la *parole intérieure* que lorsque je puis la considérer comme attendue par moi [...] Visionnaire: —qui ne peut s'attribuer ses visions et auditions. Simplement. *On* croit à un tiers parleur ou présent.”(1911, carnet “Somnia”, *op. cit.*, 24) Attention à l'emploi de “on” qui “tient

- lieu d'un sujet indistinct" du rêve. Voir à ce propos "Rêves", *Autres Rhumbs*, O. II, 652-4.
- (67) "Cette indivisibilité [=du système parler-entendre] peut être altérée. Ceux qui entendent des voix et ne SE les attribuent pas. *Ceux qui parlent en s'endormant et ne s'entendent pas.*" (1943, C. I, 467)
- (68) "dans le rêve, il n'y a pas *retour.*" (1941, C. II, 190)
- (69) "La conscience est le degré de netteté et de séparation entre un auditeur et un parleur." (C. II, 218)
- (70) "Monologue n'existe pas [=toute pensée est un dialogue intérieur] —Si ce n'est peut-être comme activité toute inconsciente—celle du *dormeur parlant.*" (1941, C. I, 300)
- (71) "Le rêve est foncièrement aussi peu distinct que les paroles que se met à dire un dormeur. Ce discours étrange et peu articulé donne bien l'idée du rêve. Il n'est pas entendu par le dormeur..." (C. II, 96)
- (72) "Qu'est-ce qui se renverse avec bonheur, dans le repos, et se détache? Qui se joue et circule sans habitude, sans origine et sans nom? Qui interroge? Le même répond. Le même écrit, efface une même ligne. Ce ne sont que des écritures sur des eaux." (*Agathe*, éd. Levaillant, 48)
- (73) "Qui parle? Qui écoute? Ce n'est pas tout à fait *le même*. Il y a une *différence* délicate de situation et d'époque. [Rapprocher de "différance" de Derrida] [...] L'existence de cette parole de soi à soi—est signe d'une *coupure.*" (1920, C. I, 407) Cf. "Etre *seul*, c'est être avec soi, c'est toujours être *deux.* [...] *division ou différence interne*" (1931, C. II, 240)
- (74) "l'impidité identique"—"Je dédaigne [...] la *trace.*" (*Agathe*, 52 et 47)
- (75) "Qui pleure là?: la poursuite par l'écriture de la trace de l'*autre.*" (J. Levaillant, "Avant rêve...", *Cahiers P. V. 3* (Questions du Rêve), Gallimard, 1979. Voir aussi et surtout du même auteur, "La Jeune Parque en question", texte capital marquant le tournant décisif de la critique valéryenne, in *P. V. Contemporain*, Klincksieck, 1974.
- (76) "Les phénomènes bizarres de l'*inconscient*—l'*écriture automatique* etc." (1902, C. II, 206)
- (77) "Celui même qui veut écrire son *rêve* se doit d'être infiniment *éveillé.*" (1921, "Au sujet d'Adonis", *Variété*, O. I, 476)
- (78) "Construire l'*inconscient*" (1921, C. II, 222)

〔付記〕

本稿は、1980年6月1日、日本フランス語フランス文学会春期大会（於立教大学）で発表した報告草稿である。このうち、第3章「夢と内的言語」の部分を意識的に外し、逆に付論「眠りと目覚めにおける身体」を組込んで、本稿の考察をさらに発展させた仏語論文“*Sommeil et Réveil chez Valéry—D'Agathe à La Jeune Parque—*”が学会誌 *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, n° 38, 1981 に掲載された。

そのあと連続的に、残された「内的言語」「内的対話」の問題を中心に、ヴァレリーのフロイト批判の再検討を含む論考の後半部「夢の詩学」に取りくむつもりだったが、身辺の雑事にまぎれ今日にいたるまで手つかずの状態である（本『研究報告』第17巻1号に発表した「J. クリステヴァの文学記号論」は、それへの必要な迂回路ではあったが）。そこで、2年前の汚れた原稿をいま一度清書する手続きを通して、当初自らに課したはずのテーマに再び息を通わせ、次の仕事へのステップにしようと思いついた次第である。（1982年4月）